

序章 雪雷

3

第1章 悪靈風たまたかせ

33

第2章 維府万国博覧会ウイーン

71

第3章 波涛

125

第4章 米国渡来の新法

159

終章 抹香鯨マッコウクジラ

237

エピソード

287

関沢明清 略年譜

復刊に寄せて

本書は1994年に刊行された『鮭と鯨と日本人』
(成山堂書店)を新装し、再編集したものです。文
中に書かれている「現在」「現行」などに連なる表
現は、発表当時のままとしています。

序章
雪
雷

肥後の人横井小楠が、諸国遊歴の旅の途中、加賀藩領に足を踏み入れたのは、嘉永四（二八五）年の盛夏のことであった。

六月二十一日（旧暦）越前藩府福井を出発した小楠とふたりの弟子は、九頭龍川を越えて細呂木で北海、すなわち日本海を眺めたあと、坂を下って加賀領内に入り、大聖寺で一泊した。次の日は、絹織物づくりの盛んな小松を過ぎて間道を取り、手取川を渡ると川口の湊町本吉の先の水島というところに投宿する。

この日小楠一行が歩いた道からは、右手に日本三名山のひとつ白山の秀麗な姿がのぞめるのだが、小楠の供をしている徳富一義の道中記《東遊日録》に記述がないのは、真夏の入道雲が隠していたためだろう。

翌、二十三日、一行が白山を見、松任で氷を食べたことを《日録》は記す。

今朝より白山晴れて鹿子まだらに雪の残っているのを眺めたが、今月給べようとは思ひもかけなかった。まことに一生の奇珍である。

白山の雪そのものを賞味したかのような記述だが、本当はどうだったのだろうか。

加賀藩では、金沢郊外医王山の雪を氷室にたくわえておき、江戸に急送して六月一日に將軍に献上し、藩主家臣もこれを食するという習わしがあった。

また、城下では、「氷々、雪の水」「白山氷」と呼んで売り歩くものがいたのだが、幕末期には、この日に限らず夏になると氷室雪が「白山雪」の名で諸々で売られていた。

小楠と弟子たちが松任で入手したのも、この「白山氷」だと思われる。

盛夏の炎暑は、北陸とはいえ加賀も西国と変わるところはない。

汗みずくになって加賀平野を歩いてきた一行にとって、雪に白砂糖をまぶした「白山氷」は大変な珍味である。

白山からもたらされたものと信じきっていたのか、それとも由緒を聞いた上で、「白山氷」の風流を日録に写したのか、今日とは違い真夏に氷を食べることなどまずありえない時代だからこそ、「二生の奇珍」なのである。

松任駅からは数キロで、加賀藩府金沢（現・石川県金沢市）市中上口の町端だ。

有松町から泉町、野町と町屋が稠密になり、やがて一行は正午ごろ、犀川にさしかかる。

水源から日本海に注ぐまでの長さが二十七キロメートルと短く流れの速い犀川は、城下を貫く間も清冽さを保ってアユやゴリを泳がせ、秋にはサケが遡上した。

これより少しあとの文久元年に刊行された加賀藩産物番付にも載せられている金沢犀川鮭だが、むろん季節違いの夏に来た小楠一行は味わうことはなかったろう。

犀川大橋をすぎると、酒造業、呉服太物、菓種商とさまざまな業種の大店が軒を並べる川

南町、片町筋。

日本一百万石の大藩である加賀藩前田家の城下町のにぎわいを横目にみて、肥後人たちは、片町からは目と鼻の先、香林坊下の大浦幸左衛門宿に落ちついた。

この日以後、七月四日までの間に小楠一行は金沢人と盛んに交流するのだが、とりわけ頻繁に会っているのが、経世家上田作之丞と、その高弟の関沢安左衛門房清、本稿の主人公関沢明清の父であった。

加賀藩の藩校明倫堂は、聖覽の遺文解釈に没頭する訓話の学を学風とする。

これを迂遠とした上田作之丞は、実用をたつとび経済を旨とする学を唱え、抛遊館という私塾をつくって藩士を教えていた。

この年のはじめ西国視察に出て、熊本横井家塾を訪れた作之丞は、小楠が自分と同じ方向を目指しているばかりか、はるかに広い視野でものを考えていることを知り、人物と見識に敬服して帰っていた。

減多に人をほめることのない六十四歳の老先生がほれこんだその肥後人が、突然金沢にやってきたのである。関沢はじめ弟子たちが色めいたのも無理はなかった。

六月二十七日、晴。七ツ比（午後四時頃）夕立、雷鳴。昼飯後上田翁宅に行き、泉沢弥太郎と関沢房清を訪問。対客八・九人。手厚い饗応を受け五ツ（午後八時）過ぎに帰宿。夜半

関沢、宇野直作来訪、夜明迄咄して帰る。

泉沢弥太郎とは作之丞の実子だが、明治の文人徳富蘇峰、芦花兄弟の叔父にあたる徳富一義の《日録》のこの文では、味噌蔵町の関沢邸に小楠が同行したかどうかは、明確ではない。

しかし、七月二日の記述に「飯後先生関沢家に御出に成る」があり、小楠が金沢滞在中関沢家を訪れたことはたしかである。

このとき九歳、孝三郎という通称で呼ばれていた関沢明清と兄の安太郎は、横井小楠にひきあわされたのだろうか。

元服前の加賀藩家臣子弟の常として、髪を真中から左右に分ける髪形をしていた孝三郎少年には、色浅黒く眉がすりあがった小楠の精悍な風采を少なくとも垣間見る機会があったはずだ。

幼い身では、客がどんな人物であるかはわからない。

しかし、小楠を大童で迎える父の態度をみれば、遠来の人の重みは十分感じとれる。

関沢家の饗応が手厚いものだったと、篤実な人格の持主といわれた徳富一義は記した。

宴の料理の豊かさではなく、関沢家の心のこもったもてなしぶりが肥後の人々の心をとらえたのである。

横井小楠の学説を奉じるものたちが肥後で実学党を形成したように、加賀では上田作之丞を師とする藩士たちがひとつのグループをつくり、黒羽織党と呼ばれていた。

集會時に憲法染という黒茶色に小紋模様を染め出した羽織を着用したからとも、人にあたることから、河豚の異名である黒羽織をとってつけられたからともいわれるが、小楠が金沢に來た頃、加賀藩を動かしていたのがこの黒羽織党だった。

加賀藩の藩政は、八家と呼ばれる門閥で構成される年寄衆によつて運営されるのが建前である。

八家中の長氏の当主、三万三千石と小大名級の禄高を食む長連弘は、関沢安左衛門の紹介で上田作之丞の門下生となり、その所説を政治の場で実践する機会をうかがっていた。

藩政の実権を握っていた藩主斉泰の寵臣奥村栄実が、天保十四年に死んで長連弘の道がひらけた。政権を掌握して筆頭家老となり、上田門下の人々を次々に起用して腕をふるわせる。

二百五十石どりの関沢安左衛門が割場奉行になったほか、水原清五郎が算用場奉行に、近藤兵作が勝手方の職について、黒羽織党の活動がはじまった。

この期の諸藩の例にもれず、加賀藩も慢性的な赤字続きに悩まされていた。これまでの調達金に依存する弥縫策ではもはや傷口はふさげないと判断したかれらは、抜本的な財政改革に手をつける。

冗費を節用し、藩主の衣服まで制限する緊縮財政策をとると同時に、貿易統制も行った。生産者を抑圧している大商人に制限を加え、領内産業の育成をはかったのだ。

この前の年には、かれらの改革の成果が、別除米十一万二千八百石、別除銀三万千八百余両の数字となつてあらわれ、藩財政は好転していた。

だが、ここへ来るまでに黒羽織党がとつた手段は、かなり強引なものだったようだ。

新田開発を強いられた農民からは怨嗟の聲が上がり、商人も過酷な口銭（税の一種）のとりたてに悲鳴を上げる。

役人の不正を暴き、汚職の摘発も容赦なくやったから、罰せられたもの、押さえつけられたものたちは、黒羽織党を激しく憎んでいた。

横井小楠を迎えた上田作之丞の門下生たちの城下での評判は、このようなわけで褒貶あいななばしていたのである。

金沢城は、犀川と浅野川がわかつ金沢の三つの台地の真中、小立野台地の突端にあった。

この城から北西に浅野川の方へ下つた侍町、味噌蔵町の関沢邸や香林坊の旅舎で、小楠は何を語り、安左衛門らはそれをどう受けとめたのか。

記録はないのだが、朱子学の現実政治における位置づけから、政治のあり方や、藩財政再建のための殖産興業策、海防問題にいたるまで、上田一門の人々が自分たちの抱えているさまざまな問題について、小楠の談話を求めたことは想像に難くはない。

加賀藩のほかに二十の藩をみてから熊本に帰つた横井小楠は、越前藩を「全体の士気が高くて君公もよほど賢明」ともつとも評価した。

かれが実現を目指しているのは「藩主が先頭に立つて真の道德政治を實踐する政治運動体」であり、松平慶永を藩主とする福井藩が最短距離にいるというのである。

隣に加賀藩については「とにかく彼方は三州（加賀・越中・能登）の外に見識出申さず」、つまり井の中の蛙かきずで外界の様子に考えを及ぼさない国だと、かなり手厳しい。しかし、金沢における関沢安左衛門の存在には、小楠は強い印象を受けていた。のちに越前藩士への書簡の中で、

金沢はどのような様子でしょう。関沢が登用になって大慶です。どの様な職掌についたか、知りたく思っています。

と、書き送っているのである。

これはおそらく安左衛門が嘉永四年、従来からの割場奉行に加えて、御馬奉行おまの兼務を命じられたときのことなのだろうが、小楠は「北陸で得た知己」登用の風聞に、加賀藩の革新を期待していたのだ。

2

小楠の金沢滞在は、足かけ十二日に及んだ。その間の交際でひとつ年下の知識人から多くのことを吸収した四十四歳の関沢安左衛門は、七月四日の小楠出立後も、連日暑い日が続き

た城下を、かけずりまわっている。

山積する問題を片づけるためには、時間がいくらあっても足りなかった。

ややつき出た口角から、慌ただしく言葉を吐きちらすと、もう次の用のために飛び出していく。

万事に悠長な家中では、安左衛門のせわせわしい態度はひどく目立った。

「関沢は軽躁で、迂闊うがたなことが多かった」と家老横山政和が書きとめている父のこの性分は、息子の明清にそっくり受けつがれ、

「関沢が来たら下駄をかくせ」

と言われていたと、関沢家ではいまに語りつがれている。

ひとつの仕事が終わるやいなや、次の仕事の思案に気をとられ、玄関先で他人の履物をつつかけて行ってしまうのが成人後の孝三郎、関沢明清だった。

軽捷俊敏な人にそそっかしい面のあることが往々だが、関沢親子らはとりわけこの性癖が濃厚だったらしい。横山政和は先の安左衛門評に続けて、次のことを記している。

：しかし邪心がなく、好人物だった。好んで諸役人の陰微をあはき、少しの汚穢おわいにも手心を加えず、浄化しつくそうとした。小利をも国益として公庫に収めるためである。だから、人にいやがられること甚はなはしかった。

関沢明清 略年譜

天保十四年	一八四三	二月十七日、加賀藩士関沢安左衛門房清（二五〇石）の次男として金沢に出生。通称は孝三郎。文久年間江戸に出て江川太郎左衛門、村田蔵六（のちの大村益次郎）に学ぶ。
文久三年	一八六三	正月、加賀藩最初の甲鉄艦、発機丸（二八五八年英国製、原名シテイ・オブ・ハンコー、七五馬力、二五〇トン）受け取りのため横浜へ出張する。十一月二十五日、新番組御歩に召し出され六〇俵、軍艦運用方棟取役を命じられて発機丸に乗り組む。
慶応元年	一八六五	七月、発機丸修理上申のため長崎より上洛の折、新艦購入の命を受ける。十月、長崎において英国製軍艦サー・ハリー・パークス号購入の任に当たる（一八六二年製造、二〇馬力・五〇〇トン、李白里丸と命名）。
慶応二年	一八六六	八月二十五日、薩摩藩士の渡欧に同行、岡田秀之助と共に長崎を出帆、英国に留学する。
明治元年	一八六八	帰国、藩学校（壮猶館英学所・道済館）の英学教師となる。
明治二年	一八六九	十一月、金沢藩権少属に任用され商法掛となる。
明治三年	一八七〇	九月八日、会計掛に転じる。十月十五日、藩制改正により免職。大聖寺、金沢両藩士によって兵庫川崎浜に設立された加州製鉄所（後の川崎造船所）の経営に参画する。
明治四年	一八七二	十一月、旧金沢藩主嗣子前田利嗣（十四歳）の英国留学に随行、再びロンドンに渡る。
明治五年	一八七二	九月、利嗣に先立ち帰国、政府の正院六等出仕となり、万国博覧会参加準備の事務を取り扱う。
明治六年	一八七三	一月、ウイーン万博へ一等事務官として派遣され、西欧における水産業の進歩発展に強い衝撃を受け、更に調査研究を進めんとするも病を患い、八月帰国する。

明治八年	一八七五	二月、米國博覧会事務取扱を命じられ、翌年内務省勸業寮六等出仕に補せられる。五月、米國へ派遣され、翌年ワイアデルフアで開催の万博準備に当たる。
明治九年	一八七六	米國及びカナダにおいて鮭鱒の人工孵化事業と缶詰製造法を学び、漁具及び漁法を調査して帰国する。内務卿大久保利通に水産業の開發を建議し、勸業寮に水産掛の設置をみる。
明治十年	一八七七	勸業寮が廃せられ、内務省御用掛準奏任・勸農局事務取扱を命じられる。以後人工孵化の必要を唱導して各地に出張、実地指導に従事し、また米國で購入の自動式缶詰機の技術的試験を東京で、産業的試験を北海道で行う。八月、東京府下新宿に開校の官立農学校校長を兼任する。
明治十一年	一八七八	六月、勲五等双光旭日章を授与される。
明治十二年	一八七九	五月、オーストリア皇帝よりフランツ・ヨーゼフ・リッテルクロイツ勲章を受ける。第二回内國勸業博覧会審査官を命じられ、次いでベルリン万国漁業博覧会の事務を執る。
明治十四年	一八八一	四月、農商務省の設置に伴い農務局事務取扱を命じられる。
明治十五年	一八八二	三月、農商務省少書記官に任じられる。六月、北海道旧開拓使引継事務受け取りのため全道を巡歴して帰り、海防と漁業について川村純義海軍卿と西郷従道農商務卿に建議する。十二月、第一回水産博覧会出品及び審査科長を申し付けられる。またこの年大日本水産会の創立に尽力し、同会幹事の任に当たる。
明治十六年	一八八三	三月、第一回水産博覧会が開催され審査部長となる。
明治十八年	一八八五	二月、水産局新設に当たり同局事務取扱を命じられ、漁務課長兼試業課長となる。十二月、水産局次長心得に昇進する。
明治十九年	一八八六	二月、農商務省少技長、五月、三等技師・奏任官三等に叙せられ、十一月には勲四等旭日小綬章を授与される。この頃千葉県九十九里浜のイワシ漁が不漁続きで漁民の困窮を救済のため出張、地曳き網に代えて米国式中着網による沖漁業を奨励し、自らそのひな型を作つて指導する。

明治二十年	一八八七	四月、伊豆七島巡回視察の結果、その近海の鯨群に着目、近代式捕鯨に取り組むべきであると考へ、米国式捕鯨銃を改良して試み成功する。
明治二十一年	一八八八	房総半島勝山浦(現鋸南町)の捕鯨業者醍醐組を指揮し、伊豆大島近海に出漁、植鯨(齒鯨の一種)數頭を捕獲、この成果を得て設立の日本水産会社に参与する。
明治二十二年	一八八九	二月、新開設の水産伝習所(現東京海洋大学)所長に推され、また東京農林学校(前記農学校の後身)に新設の水産専修科教授となる。
明治二十三年	一八九〇	三月、水産局が廢されて事務が移管された農務局第四課の課長となる。この年開催の第三回内國勸業博覧会に初めて水産が独立の部門となり、審査官として大いに努め、後にこの功により紫綬褒章を授けられる。
明治二十五年	一八九二	八月、当時解散の危機にあつた日本水産会社を立て直し、率先遠洋漁業の振興を図らんとして退官、住居を房総半島の館山に構えて捕鯨及び遠洋漁業事業に乗り出す。十一月、外務省の委嘱により朝鮮半島沿海の漁業状況を調査する。
明治二十七年	一八九四	岩手県三陸沖の抹香鯨漁に挑戦して成功、日本初の抹香鯨捕獲者となり捕鯨家としての名声を高める。この年再び朝鮮に赴き、釜山水産会社の業務を監督するが、心臓病を發して帰国する。
明治二十八年	一八九五	三月、第四回内國勸業博覧会審査官を命じられる。五月、水産調査委員となる。
明治二十九年	一八九六	八月、自ら遠洋漁業用に考案の洋式帆船豊津丸(七二・二五トン)が竣工。十二月、豊津丸を指揮して伊豆大島沖のマグロ漁に従事する。
明治三十年	一八九七	一月、帰港の途中心臓発作を起こして倒れる。九日、病が重くなり死去。享年五十五(満五十三
明治三十二年	一八九九	年十月九日)。十六日、東京府豊多摩郡中野村(現東京都中野区本町二丁目)成願寺に葬られる。五月、有志により館山町(現館山市)北下台(ぼつくだい)公園に大頌徳碑が建立される。

本年譜は、今井一良「九谷焼の名工・竹内吟秋と近代水産業の開拓者 関沢明清―一人の接点としてのドクトル・ウグネルの存在―」(石川郷土史学会誌 第二六号(一九九三・一二)所収)に一部加筆した。

復刊に寄せて

金沢工業大学教授 吉道 悦子

数年前、石川県立図書館で一冊の本と出合った。郷土関係の本が並ぶ棚に、まるで隠れん坊をしているような地味な書物があった。『鮭と鯨と日本人』という、一風変わったタイトルの本である。大して興味を湧くような書物ではないように思え、次の本に目を移そうと思つた瞬間、副題の「関沢明清の生涯」の文字が目飛び込んできた。この〈関沢明清〉こそ、まさしく私が当時資料をあさり始めた人物の名だったのである。小躍りをしながら、私はその本に手を差し伸べた。

おそるおそる本を開く。読み出した瞬間、壮大なスケールで描かれた物語、臨場感あふれる描写に圧倒され、その場に立ったまま、一気に読み終えた。

「肥後の人横井小楠が、諸国遊歴の旅の途中、加賀藩領に足を踏み入れたのは、嘉永4（1851）年の盛夏のことであった」で始まり、その後展開される幕末の加賀藩の思想的、政治的背景。〈日和見主義〉と揶揄される藩の内幕。それらを遠景に加賀藩士関沢房清（安左衛門）・明清（孝三郎）父子の活躍が浮き彫りにされている。

雄藩であった加賀藩の幕末の図は糸が絡んだように複雑であった。しかし、先見の明あり

と称された加賀藩士関沢房清は、来たるべき時代がそう遠くないと判断し、信念に基づいて自分の行くべき道を進んでいった。頑固ではあるが、私財を投じてまで困窮する人々を救おうとした心根の優しさは、やがて敬愛する父の背中を見て育った明清に受け継がれていった。



関沢明清が房清（安左衛門）の次男として金沢に生を受けた1843年は、まさに列強のアジア進出が顕著になってきた頃である。隣国中国ではアヘン戦争が起こり、鎖国下にあつたわが国では外国船に対し、右往左往する状態であつた。1825年には（異国船打ち払い令）が下されるも、やがて泰平の夢を破るアメリカの黒船が日本に姿を見せる。海防は避けでは通れない焦眉の急であつた。

1864年、幕府は加賀藩に、將軍家が上洛する際に家臣が乗船するための蒸気船の借上を命じた。弱冠21歳で軍艦運用方棟取に抜擢された明清は、操船指揮者として、荒れ狂う冬の日本海を越え、江戸まで航海した。

船舶の西洋技術に圧倒された幕府は、徐々に密留学という形で優秀な若者を秘密裡に海外に送り出した。明清もその中の一人である。1866年、薩摩藩士と共にイギリスに向かい、ロンドンで船舶・機械技術の知識を積んだ。そして、まさに維新の年に帰国した。

帰国した明清を重大任務が待っていた。造艦所を有する製造所の建設である。藩営の七尾軍艦所に隣接して七尾製造所が建設され、続いて、加賀藩、大聖寺藩と共同で兵庫に加州兵

庫製鉄所が誕生した。明清はこのために全力を注ぐ。加州兵庫製鉄所は国内でも有数の船舶工場となつたが、1871年の廃藩置県とともに船舶などは政府によって買い取られ、加州兵庫製鉄所はあつさり閉鎖されてしまった。

目標を失つた明清にまたも渡欧の機会が巡つてきた。

1871年、国家の指針を模索すべく欧米視察のため（岩倉具視使節団）が結成される。旧幕臣から新政府要人まで幅広いメンバーで構成されており、加賀藩主前田慶寧の嗣子である利嗣もイギリス留学のため途中まで同行することになった。明清はその随行人として選ばれたのである。

時をほぼ同じくして、オーストリア・ハンガリー帝国の首都ウィーンでは、万国博覧会が企画されていた。日本は万博への招聘を受け、前回の幕府、薩摩藩、鍋島藩が個別に参加していたのと異なり、初めて、日本政府として大々的に参加することになった。

実務レベルで活躍できる人材がほしい――。政府はロンドンに滞在していた明清に急遽、帰国を命じ、すぐさま、博覧会準備本隊の先行としてウィーンへ送った。語学力はもとより、加州兵庫製鉄所の運営などの事務処理能力が買われたのだ。1873年3月、万博会場を準備万端に整え、明清は日本からの派遣団を帝国に迎えた。

1873年5月、皇帝フランツ・ヨーゼフが博覧会の開幕を華々しく宣言してからしばらくして、明清はやっと自ら博覧館内の展示を見て回った。関沢はここで初めて（鮭の養殖）

を知る。(人工孵化)と(稚魚放流)こそが、日本の輝かしい未来を作ると明清は確信した。1876年、アメリカのフィラデルフィア万国博覧会でも事務官の命を受けた明清は、現地で鮭・鱒の人工孵化の技法、缶詰の製法を学ぶ。帰国後、彼は日本における水産業の重要性を直接内務卿大久保利通に建議する。大久保も明清の訴えにすばやく反応し、勸農局の創設を約束した。

明清がいま一つ重要だと感じていた水産業が捕鯨であった。日本近海では西洋人の捕鯨が活発化しており、術を知らない日本人はそれをただ黙って見ているしかなかった。明清は銃を使用する西洋式の捕鯨術を取り入れ、伊豆大島と金華山沖で、旧来の方法では不可能といわれていたマッコウクジラの捕獲に初めて成功した。晩年には、新資源マグロ漁に出て大量のマグロを捕獲した。しかし、病み上がりで再びマグロ漁に出て、帰らぬ人となったのは1897(明治30)年のことであった。



本を閉じた後、私はどうしてもこの書の存在を皆に知らせたいという強い思いに駆られた。発刊されてから10年以上が経っており、書店では容易に手に入らないようである。出版元に連絡を取ったが、当面増刷の予定はないとのことであった。筆者はすでに亡くなっていらしたが、幸い、奥様の連絡先を教えてくださいました。

早速奥様にお電話をし、一読者として、この作品がすばらしいと思ったことをお伝えした。

そこで、筆者の和田顕太氏が石川県のご出身ということも知った。

その後、関沢明清にまつわる、さまざまな資料が手元に集まってくると、一つ分かったことがあった。和田氏が書いた作品が、単なる歴史ロマンという枠を超え、どんな細部の描写でも緻密な調査に基づいているということである。

例えば、一般的な資料には「関沢明清はアメリカで人工孵化の技術を学びわが国に紹介した」のように書かれているのだが、和田氏はそれならば「アメリカのどこで誰に習ったのか」という疑問点を解明すべく、1979年フィラデルフィアに足を運んでいる。現地で得た資料から「関沢明清は東部でベアード教授から水産事情を学んだあと、帰国の途中北カリフォルニアに寄り、教授の紹介でストーンから人工孵化技術を学んだ」という仮説を立て、検証を始めておられたのである。

そして、ストーン氏がベアード教授に、ニューハンブシャー州のチャールスタウンの自分のマス養魚場から、1876年の10月25日、「今夜、セキサワ氏を迎える予定です：」と書かれた、そして10月31日、「セキサワ氏の訪問は大変楽しいものでした」という葉書を送ったという事が判明した。「帰国の途中」ではなかったのだが、和田氏は長旅の末に確証を得ることができた。その言葉がそのまま本書で再現されている。

気の遠くなるような検証の旅である。

ふと、北國新聞社が出版物を手がけていることを思い付いた。復刊のことを電話でお聞きすると「良いものなら可能ですよ。一度お話しを聞かせてください」と爽やかなお声が返ってきた。私達は、〈復刊〉に向かって歩み始めた。

明清がウィーンで奔走していたそのちょうど100年後の1973年頃、私はウィーンで暮らしており、万国博覧会の会場跡にある公園を散歩していた。当時はまだ関沢明清という人物を知らなかったが、いま思えば、私の一歩一歩が、明清の足跡の一つにそっと触れていたような気がした。そして、明清の背を追った和田氏の情熱もまた、時空を超えて、そこに重なっているように思われた。いまこうして復刊が実現し、関沢明清の功績、和田頼太氏の作品に、あらためて光が当たるわけであるが、ここまでに、多くの人々が目には見えない糸で結ばれていた気がしてならない。

最後になりましたが、このたびの出版に際して、和田頼太氏の奥様の和田香澄様から温かいエールをいただきました。誠にありがとうございます。また、編集においては、北國新聞社出版局の西出崇氏に大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

平成24年4月

和田頼太氏が旅立たれた春の季節に

和田 颯太 (わだ・えいた)

1936(昭和11)年10月、父の赴任先だった兵庫県加古川市で生まれ、6歳のころ、石川県小松市の実家に戻る。芦城中学校、金沢大学附属高校を経て、早稲田大学第一文学部(仏文専攻課程)に入学。1960年に卒業後、日本コロムビア勤務を経て、博報堂でテレビ番組などの企画を担当。博報堂勤務時代から執筆活動を始め、1975(昭和50)年、小説「密猟者(ザ・ボウチャー)」が雑誌『小説現代』で新人賞を受賞。ほか『文藝春秋』などに近現代史などの分野に関するノンフィクション作品を発表した。1993年3月、病のため死去。享年56。

関沢明清

若き加賀藩士、夜明けの海へ

2012(平成24)年4月20日 第1版第1刷

著者 和田 颯太

発行 北國新聞社

〒920-8588 石川県金沢市南町2-1

電話 076-260-3587(出版局直通)

FAX 076-260-3423

E-mail syuppan@hokkoku.co.jp

ISBN978-4-8330-1865-4

©Kasumi Wada 2012, Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

本書記事・写真などの無断転載は固くおことわりいたします。